

「1990年代後半以降の人口回復期の大阪市における居住者特性と建物高さの変化」

……………桐村 喬（京都産業大）

「地域移転可能な回遊行動シミュレーションモデルの開発」

……………岡田佳佑・鈴木丈昭・田中悠貴・鳥井政宏（株式会社ゼンリン）

（貴志匡博 記）

国際人口学会理事会（フランス・パリ）

2025年11月に開催された国際人口学会（IUSSP）総会で副会長に任命されたため、2026年4月7～8日に IUSSP の事務局があるフランス・パリのフランス国立人口研究所（INED）内で開催された第1回理事会に対面で参加した。4年間の任期の中で、最初の理事会は対面で行う、ということが通例となっているようである。理事会では、IUSSP の運営や次回2029年7月にスペイン・バルセロナで開催される予定の国際人口会議、また会員からの提案により実施される科学パネルなどが議論された。1927年にジュネーブで世界人口会議が開催され、翌年1928年に、IUSSP の前身である国際人口問題研究学会連合会（IUSIPP）がパリで設立された。そのため2028年は IUSSP 設立100周年にあたり、関連するイベントも計画されている。

（林 玲子 記）

超百寿者国際セミナー（フランス・パリ）

IUSSP 理事会の直後、2026年4月9～10日に、偶然同じ会場（INED）で第16回超百寿者国際セミナーが開催され、「日本の百寿者の長期的動向」と題する報告を行った。百寿者というのは100歳以上高齢者であるが、超百寿者（supercentenarian）は110歳以上を指している。百寿者はすでに日本では9万人を越え、世界でもかなり多くの数にのぼるようになったため、超高齢者の研究はより人数を絞って超百寿者について行われるようになったようである。

セミナーでは、国際長寿データベース（International Database on Longevity: IDL）の現状報告に続き、欧米および日本、チリの百寿者の動向、超百寿者の分析手法、年齢確認等に関する報告が行われた。超百寿者研究は、人口学分野のみならず、バイオマーカーなどの医学・生物学的研究も多く行われており、またギネスブックに掲載するためのデータベースも別途作られているなど、多くの関係者が活動しており、それぞれの異なった思惑も交錯しているようである。また、カナダのウレット（Ouellette）教授により、日本における90歳代の死亡率が低下せず停滞している、という報告も行われ、超高齢者の死亡が安易に「老衰」と片付けられ、医療・介護がおろそかになっていないか、「日本は世界に誇る超長寿」という状況が揺らいでいるのではないかと危機感を抱いた。

（林 玲子 記）

第59回国連人口開発委員会

2026年4月13日（月）から4月17日（金）にかけて、第59回国連人口開発委員会（Commission on Population and Development : CPD）が国連本部（米国・ニューヨーク）で開催され、国連日本政府代表部より加藤琢真参事官、本研究所以り林玲子所長と筆者が出席した。今回のテーマは、「持続